

読売新聞 きょう（9月24日）のイチ押し

1面 アビガン 来月にも承認申請

新型インフルエンザ治療薬「アビガン」について、富士フイルム富山化学は、コロナ患者に対する治験で有効性が確認されたとして、10月にもコロナ治療薬として申請することになりました。

- ★ 承認されれば、抗ウイルス薬「レムデシビル」、抗炎症薬「デキサメタゾン」に続いて3例目のコロナ治療薬となります。
- ★ 発症から回復までの日数が、「アビガン」を投与されたグループの方が、投与しなかったグループより短いことが治験で確かめられました。

社会面 松井大阪市長、都構想否決なら引退

大阪市の松井市長は、大阪都構想の是非を問う11月1日の住民投票で、反対多数になった場合は政界を引退する考えを示しました。

- ★ 日本記者クラブで開かれた記者会見で松井市長は「負けたら政治家としては終了」と明言しました。23年までの市長任期は全うします。
- ★ 都構想を巡っては、5年前の住民投票で橋下徹市長が「否決されたら引退」と表明し、実際に引退に追い込まれています。
- ★ 「選択ふたたび」のワッペン記事では、立憲民主党の動向に焦点を当てました。大阪で党勢が衰える中、十分な反都構想活動ができないのが実情で、来阪した枝野代表の都構想への言及も少なめでした。

他紙と比べて

横断歩道近くに停車することで死角ができる「危険なバス停」問題。本紙は昨年9月から全国調査を行ったり、連載を掲載したりしてキャンペーンを展開しています。社会面では各地で相次ぐ事故についてまとめました。高知県では、小学4年の男児がバスの目の前の横断歩道を渡っていて車にはねられ、一時重体になりました。国交省の調査では「危険なバス停」は全国で2000か所に上り、移設などの対策が急がれています。